
あなたは、強い魔王さま？

阿山利泰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたは、強い魔王さま？

【Nコード】

N 6 1 3 6 B

【作者名】

阿山利泰

【あらすじ】

ごく普通の高校生光一が、魔王になって、てんやわんやの大騒ぎ的なノリのファンタジーものです。

俺は、多分普通な一般人？ 「第0話」

『やっと見つけた…』

暗い暗い闇の中、声が聞こえる、澄んだ音色の鈴の様な声が。

『やっと見つけたわ…』

聞き覚えがあるような、しかし思い出すことの出来ない声。

『光……』

さつきとは違う声だがこっちの声はハッキリ知っている。

「光ーお兄ちゃん、起きてー」

いきなり布団を捲し上げられ、ほかほかの躯体がまだ寒い部屋の空気にさらさる。

おもわずクデクデとそのばに丸くなる。

「うぐぐぐううう」

丸くなるだけでは、寒さは防ぎきれずにうなり声をあげる。

「お兄ちゃん、早く起きないと遅刻するよー!」

妹の小さめの足が腰にあてがわれ、ゲシッ、トドメとばかりにベツトから蹴り落とされた。

「うぐぐ、妹ももう少し優しく、そっと、女の子らしく、起こそうとは考えなかったのか？」

床に打ち付けた腰をさする。

「いいのよ、ちょっとやさっとじゃ起きない方が悪いの」
言っが早いかそそくさと部屋を出ていった。

すっかりと目も覚めてしまったため、起きて学校の仕度を始める。腰はだいぶ痛みも引いた、寝癖を直し、Yシャツに袖を通して、一階のリビングまで降りる、見るとすでに朝ご飯が出来ていた。

俺が席に着くと同時に、すでにご飯を済ませた妹は席を立つ。

「じゃあ、行ってきます」

「行ってらっしゃい」

軽く手を振り見送り、ささつとご飯を平らげる。

特に何も入ってない、軽いバックを肩にかけ、遅刻しないように家を出る。

自転車にまたがり、ペダルを漕ぐ、行きは下り坂、約10分で学校についてしまうが、

歩くとなるとそうは行かない、30分はかかる道のである。

そこそこ急な下りざかを一気に駆け抜ける、冷たい空気が肌をチリチリ刺す。

いつも通り、授業開始ギリギリに駐輪場に到着、自転車に鍵をかけ教室に走る。

これまたいつも通りギリギリに着席。

「よお」友人に軽く挨拶をして、まもなく授業がはじまる。

勉強は好きでも嫌いでもないが、テスト前にならなければ机に向かうことは少ない、

かと言って授業中にしっかりと勉強するでもなく、今日もノートをとり、

適当に授業を聞いて、たまに寝てやり過ごす。

あっという間に昼休みだ。

「待ちに待った〜昼休み〜」

購買に昼飯を調達しに行こうとした時に、鼻歌混じりに悪友が近づいてきた。

「今日も元気かつ光一君〜」

「総一、お前は元気そうだな、何か用か？」

こいつは小学校以来の腐れ縁、なにかとつるむ時はいつもこいつである。

「おうおう、元気いっぱいだ、飯はどうするよ？弁当か？購買か？学食か？断食か？」

ついでに俺は学食希望だが」

「一応、購買を考えていたが、学食でいいよ今のところ財布は温かい」

学校の購買も学食も一般と比べれば安いのだが、購買の方がより安上がりだ。やはり懐の暖かさで購買か学食か果ては断食か別れてくる。

「じゃあ学食行こうぜ〜急がねえと席なくなっちゃう」

総一は急かせがなら教室を出る。

「了解」

学食にはすでにほとんどの席が埋まっていたが、かるうじて一ヶ所だけ空きを見つけ座る。

「俺はカツ丼でもくうか、お前何にするよ？」

「うーん、狸うどんにでもするかな」

「OK任せろ、食券買ってくる」

総一にお金を手渡すと颯爽と買いに行った。

程なくカツ丼と

狸うどんをトレーに乗せて持ってきた。

「へい、お待ち!!」

出された狸うどんは、ドンブリ一面赤一色、狸の部分すらみえない。

「総一君？これはーなんですか？」

「狸うどん」

即答、しかも何を言っているのだ？と疑問な顔をしている。
まるでこつちが変なことを聞いている錯覚におちいる。

「何でこんなに赤いのですか？」

「サービス!!うどんには七味!!」

限度というものを知らないのだろうか…

口いっぱい広がる辛み、辛み、辛み、辛み、それは全ての味覚を否定し、

赤一色に染め上げ、冬真っ盛りの寒い季節に汗だく、
自分から発せられる湯気で視界がかすむ程。

結局、唇を真っ赤に膨れ上がらせながらも完食、われながら良く
頑張った。

二度と彼に頼むのを止めようと心に誓った。

「確か、午後は家庭科か」異様に眠いんだよなーあの授業、
光一君「私はあの授業で寝なかった例が無い」

「おいおい、俺も人の事言えないくらい寝てるが、大威張りで断言
することはないだろう、成績1が付いちまうぞ」

話しの流れからして分かってもらえるだろうが、
成績1とは赤点である。

「ナリーーンセンス、私に限ってナツシング」

オーバーなアクション両手を前でクロスさせる。

「一夜漬でテストやれば平気平気」

悪友とのそんなこんなのやり取りをしているうちにそろそろ次の授業の時間に近づいて来た。

結局この後二人とも机に伏した事は語るまでもないだろう。

俺は、多分普通な一般人？ 「第0話」（後書き）

はい

読んでいただきありがとうございます、阿山利泰です。

前回書いたのが？7月くらいで半年以上日にちが空いてしまいました、た、初の連載ものです。

この元の原稿はかれこれ2年前書いたものです、

元の原稿は読めたものではありません！

手直しと書き足し何とか読んでもらえるかどうか…
意を決して出してみました。

これからがんばって完走目指して行きますので
応援よろしくお願いします。

あなたは、私の魔王さま？ 「第1話」

部活を終わらせ、悪友の総一と別れ帰路につく。

別れ際に「明日の宿題よろしくな」と残すあたりさずである。

悪友の顔を思い出し、昼間の激辛うどんでヒリヒリする唇をなぜる。
今日も一日が平和平凡に過ぎようとしていた。

『やっと見つけた…』

「ん？」

デジャブ？最近どこかで聞いた事のあるような。
うーん思い出せないな。

「やっと見つけた」

今度はしっかりと女の人の声が聞こえてきた、

しかしながら少し見渡してみてもそれらしい影も見当たらず、
ここにいるのは自分だけのようだ。

「やっと見つけたわ！あなたは、あなたは私の魔王よ！！」

木枯らしふく冬の日暮れの早い夕焼け空、

今の今まで誰もいなかった、オレンジ色に染まる坂道に突如目の前に現れた少女。

不意の出来事でめんくらい、たじろぐ。しかし本当に驚かされたのはこの後の事、
急に抱きつかれた。

抱きつかれたのだ。

全く予期せぬ出来事で思考がシャットアウト、これまでの人生で抱きつかれたこと皆無の光一、完全にパニックに陥っていた。

少しでも冷静になろうと深呼吸をして、抱きついてきた少女を見下ろす。

全く見覚えの無い少女、外見から判断して十五前後、しかしそんな事がどうでもよくなる様な奇抜な格好をしているのだ。

あまりに自分があたふたしていたのだろう、少女に大丈夫？と声をかけられた。

「ああ？あのっ、オレが間違ってなければ初対面だよな？」

「そうね、あなたの言う通り初対面ね」

「で、さっきの魔王って何だよ魔王って…さっぱり理解できないんだけど」

「魔王は魔王よ？、魔界の王様。あ、自己紹介がまだだったわね、私はマール」

全く話を変えて自己紹介を始めた、少女は『マール』と言っらしい。

「君は何者なんだ？」

あんな格好で抱きつかれたら誰もが思う事だろう。しかしマールが手を前に突きだし質問を止められる。

「待って今度は私の番、私だってあなたの事知りたいんだから、あなたの名前は？」

「小泉光一、灯夜高校二年B組十四番これでいいだろ？」

さつきも言ったが君は何者なんだ？」

「光一ね、わかったわ」

背中の方に指をさして、羽をパタパタはばたかせる。

「見て分らない？悪魔よ」

…パニックのうわがさね状態だが二つの解答が導き出された。

一つ目は、この少女は可哀想な事に頭がやばいのか、

二つ目が、オレは今実は家庭科の授業中で、涎で机に湖を作っている最中かだ！

おもむろに頬をつねる、ひっぱる、ねじる、結構強く。

「うん、いたひ、夢ではなさそう」

結果、後者ではないようだ、夢の中でつねって痛かったら別だが。

残るは…、少女との距離を一步だけあけ。

「マ、マールちゃんは頭とかに電波とか受信して無いよね？」

失礼極まりない質問、うん言った後に後悔。

「無いわよ！！それとちゃん付けは止めて、光一の何倍も生きてるんだから！」

ぶんすかと形容するしかない状態だ、湯気まで出始めてるよ。

「じゃあ、これを見ても信じられないかしら？」

右手を前につき出される、その手がほんのうっすら光ってみる。
「ダークボール」

手の前に野球ボール位の黒い玉が出てきて、バチバチ音を立てている。

かなり危険な香りがぶんぶんする。

「えい」

黒い玉が自分のすぐ近くの木にヒット、ぶしゅぶしゅ音を立てて塵と化す。

「絶句!!」

「どう?それでも信じられない?」

笑顔が逆に恐い、夢であって欲しいが、高温で焼けた木の匂いが現実だと教えている。

マールに頭から足の先までじろじろ見てくる。

「光一?魔力が感じられ無いんだけど…私は疎い方だからはっきりと言えないけどね、

あなた魔王よねっ?」

「…しるか!!いきなり現れたヤツに『あなたは魔王よ』なんて言われて、

オレが分かるかよ、なんでオレなのかこっちが聞きたいくらいだ」

「あ、聞きたい?それならゴソゴソあった!これこれ」

捕捉が必要だろうゴソゴソはちゃんと彼女が言っている、セリフである。

少女が取り出したものはまさしく見間違えることなくドラ ンレ ーダー。

「これは私が仕えていた前の魔王様がくれた遺品で、これを使って異世界から新しい魔王を見つけて来るのが魔王様からの最後のお仕事。」

で、これを使って見つけたのが小泉光一あなたよ!」

決めにマールがビシッとゆびを指す。

「それで俺に何をしろと?」

「光一には魔界に行って魔王に成って貰うの。今魔界では魔王大売出しな程魔王がいて、

そこで天下をとって本当の魔界の王、大魔王に成って貰いたいのに」
言ってることは本当だろう、記憶に新しすぎる塵と化した木を
思い出す、

どうやらとんでもない事に巻き込まれてしまったようだ。

「もしここで断ったらどうなる？」

と云うか普通断る！悪徳勧誘を断れなくても、ノーが言えない日
本人でも、コレは断る！

「普通に殺すわね、そうしたら魂を食べてあげる。
それに魔界に行けばメリツトもあるよ、魔界にはココでも価値のあ
る宝がいっぱいあるし、

光一が魔界で手に入れた財産を持って帰ればかなりの金額になると
思うわ、

簡単に遊んで暮らせるだけは稼げる。魔界で中魔くなかまでも作
れば世界征服も夢じゃない！！

それにそれに可愛い悪魔だって多いし魔王になればモテモテよ？」
最初怖かったマールの顔が最後には必死で涙まで浮かべている。

うつ・・・世界征服はどうでもいいが、遊んで暮らせるのにはちょ
っと引かれる、
どうするか・・・

選択肢 魔王になる or 魔王にならない

ハアゝもう吹っ切れた、死ぬよりはマシだろう？

小泉光一17歳はあの黒いボールに当たって死んだ事にしよう。

選択肢 魔王になる or 魔王にならない

「断つたら殺されちゃうんだろ？魔王とやらになってやる」
「マールが意外！と驚いた顔をした。」

「え？いいの、本当にいいの？危ないよ？死んじゃうかも知れないんだよ？」

無理やりでも連れて行こうと思ったのに？」

おい！さっきと言ってる事が違うぞ。

「ああいいよ、金稼ぎ？にも興味があるし、家庭科で涎を垂らしながら寝てるより、
オレを必要としている面白そうな事に命を賭けてもいいんじゃないか、ってね」

総一が居ないのが残念だ、彼の方がこの話に食いついただろう。

少女がはにかむ様にニカツと笑いながら抱きついてきた、
今さらまじまじと感じたがとてつもなくかわいい。

「お、おい抱きつくなくて」
顔が赤くなってるのが自分でも分かるくらい熱くなっている。

「さて、じゃあ今から魔界に行こう！」

「え？今から？でも、いきなりっ？何かと面倒な事に…」

「平気よ、魔界とこっちの世界じゃ時間軸が全然別物…らしい。
と言つか、まゝそんな感じだから千年経とうが二千年だろうが戻ってくるのは今、

ちようど今に戻ってくるハズ。よし、問題ない。じゃ行こう」

「え？ちよつ、ちよつ？」

半ば強引だがこうしてオレの魔王生活が始まったのだった。

あなたは、私の魔王さま？ 「第1話」(後書き)

はい

読んでいただきありがとうございます、阿山利泰です。

やっと、話が始まってきました。

どうでしたでしょうか？ 気に入ってもらえれば幸いです。

続きはこれから編集ですので少し時間があ入れしますが、どうか良しなに。

俺は、ホントに魔王さま？ 「第2話」

マールに拉致られて数日が経つ。しかしここが元の世界と違うといわれても…、

魔界に来たものの一步も外に行つてはいないし、露骨にそれらしい違いも見当たらない、

特に詮索もしてないため外国の古城に連れて来られたのだといわれても納得しかねない状況だ。

「マール、あんたとでも面白い物引いてきたねー。この魔王様攻撃魔法一切使えないよ

もうなぐんも、というより戦力ゼロ」

血まみれの白衣、白衣といってもナースの方じゃなく羽織る感じの研究员タイプを着た

美人女性がカルテを持って言った。

「えーでも、ちゃんとセンサー反応してたし」

「ちゃんと最後まで話聞きなさい、その代わりすごい能力があるみたいよー」

「なによンジャー、もったいぶつてないで言いなさい」

ンンジャーと言われた血まみれ白衣を着た金髪ショートでメガネの女性がニヤツと笑う。

「驚かないでよー？ 光一の能力は強力な束縛と行使」

マールは喜ぶよりもガツカリした顔をした。

「そんなの私達でもできるでしょ？ 簡単な使い魔くらい」

「フツ、これだから素人は…その「使い魔」が魔神クラスだろうが

魔王クラス

だろうが関係なし！しかも複数束縛し続けれる、さらに好きな形に束縛できる、

そして束縛した悪魔を思いのまま行使できるのよ、どこかの魔王もこれほどじゃないわ。

卑怯的な大天使どころか神でも使えるかどうかの力なんだからっ…
ハアハア…わかった？」

ジンジャーが息が切れるまでノンストップでしゃべりきった。

「簡単にまとめるとポケ　ンといっしょでしょ？今のを聞く限りオレは凄いのか」

ベットから起き上がり服をはおる。魔界に連れて来られて以来実験だの身体調査だので拘束三昧とても疲れた。

ここは魔界の城で、この城はマールの仕えていた魔王の城。

マールが仕えていた頃は城下は賑い、兵士数は3千万くらいいたそうだが、

今では城は寂れ閑散としていた、兵士は一万分の一もいないらしい。いつ壊されてもおかしくない程のぼろい城だ。

魔王が倒れるとともにマールの同僚の大半は消えた。

残ったのは役三千の兵士と古びた城、マールとジンジャー、その他二人を含んだ四人の重臣だけだった。

所詮悪魔は義理なんて有りはしない、このまま付いていても利益が無いと分かると
即離れて行ったらしい。

「ふふふふつで、そのポ　モンの捕まえ方はどうやるんだ？」

自信タツプリで非常に情けない事を聞く。

「そんなことあんたが決めるのよ、リスクが高ければ高いだけ効果が強い」

ジンジャーがため息交じりで言う。

「しょうがない、リスト作ってあげるから自分で選びなさい」

一旦部屋を出て行ったが、すぐに戻ってきてリスクと成功率の表を作ってくれた。

「リスクの高い方が良いモンスター　ールで捕まえやすいって事がマールが暇そうな顔をして頼つたを抓ってきた。

「さっきから何訳の分からないこと言ってるのよ」

「ん？ジンジャーが分かり難い説明するから、とっても分かり易く理解しただけ。」

んじやあ捕まえた悪魔で倒した悪魔を仲魔にするなんかどう？」

「ちゃんと読みなさい簡単すぎるわよ。強い悪魔を捕まえるにも、多勢に無勢で簡単に

条件クリア。前例としてコレクターという魔王がいるんだけど、彼は殺した悪魔を

捕まえるという条件を捕まえた悪魔の強さが半分となるリスクで補ったりしてるわ」

ジンジャーがめがねを上げながら言う。

「だったら敵を倒して生きてる間に左手で触る、出せる仲魔は一匹づつ。

それと仲魔は30人まふえって！！何すんじやい大事な話の時に」

またしてもマールが頼つたをつねってきた、今度は話の途中で「だって訳分かんなくてつまんだもん、ぷいっ」

ホッペを膨らましてそっぽを向く。

「あー悪かった。悪かったからもう少し待ってろ、ジンジャーさっきのはどう？」

ジンジャーは首を傾げながら悩む。

「ああ、良いんじゃない？リスク的にはまあまあよ、生きてる間に左手で触るで40%、貴方じゃまず近づくだけでひき肉、

仲間は一匹ずつで34%、多勢に無勢をなくして、中魔は30人までで25%、これはオマケで…ばっちりよ。

99%成功するだろうね、倒せれば、ね」

ジンジャーが説明をしている間、マールはずっと頬ぺたを引っ張っていた。

これがなかなか間抜けツラだったらしく、ジンジャーは喋ってる間笑を堪えるのが

やっとのようだった、今は口に手を添えてクスクス笑っている。

「そうだこの後、光一会議室に来て。マールもあの二人を会議室まで連れてきて」

ジンジャーは言いながら医務室から出て行く。

「ハーイ、光一、早速私は犬っコロとリンスを連れてくるから、先に会議室行つてて

会議室はココから右右左左左左右右左右左右左右左右左右左右左右の部屋だから」

ダダダダーと風の如く走り消えて行く。

「え？右右左？ええどこだい？」

この城の作りはそこまで大きくないくせに意味無く入組んでいて迷路のようだ。

敵の進入を考慮してこの構造になっている、他国の城も似たり寄ったりなのは言うまでもない、魔界の国取りの仕組みを聞けば納得行くことであろう。

しかし今の光一にとっては…

無意味だ、確実にさつきだってトイレに行くのに迷う始末。もっと簡素にした方がいい。

ゼツタイいい。

「光一まだそんな所にいたの？もうみんな集まったよー」

マールがダダダダーと戻ってきた。マールはあの二人とやらを召集かけた後、

まだ会議室に来ていないオレを探しに来てくれたようだ。

「さつきで分かるか！！」

テクテクとマールの後ろを歩いていく。いくら曲がっても目印らしい目印が無く、

たまにある扉も皆同じで自分の位置がさっぱり分らない。

「じゃあしょうがないなー。私の使い魔を貸してあげる、璃恩来て」

ポン！、マールの手のひらに小さい女子の悪魔が乗っている。

「ふー。久しぶりねマール、こいつがおまえの探していた新しい魔王？

魔力が一切感じられないわね」

手のひらにいた璃恩が跳んでマールの肩の上に移り鎮座する。

「うふふ、相変わらず鋭いわね、私もよく分らないんだけど束縛がケモンで

リスクが99%だから神より強いって」

今のを聞く限り一切分かってないようだ、無理もないが。

「まあいい。とにかくなんか強いって事ね…で？なんか用？」

「ああそうだった、光一…新しい魔王様がこつちの生活に慣れるまで手助けを

して欲しいの」

不意にマールを見失いかけて急ぎ足になる。

「ようするに何も分からない赤ちゃんのお守りをしると？ガラガラ持って、オムツは？

替えなくていいのか？」

璃恩がひにくたつぷりで言う。傷つくよ？

「たぶん平気？。でもトイレの場所とか教えてあげてね」

疑問形か疑問形なのかそこで。しかしながら何も反論できない自分が悲しい…

ポン！また璃恩が跳ね今度はオレの肩に乗ってきた。

「まヨロシクたのむ。一応魔王らしいからな…面倒見てやる」

「こ、こちらこそ」

そんな事をしているうちに、会議室に着いた。

「遅い！！何やってたの？とつくに皆集まってるわよ」

ジンジャーが少し切れ気味みたいだ。見るとあの二人とやらも隣にいるようだ。

椅子に座っていた人影が一つ消え、目の前に現れた。その人影が
跪き言った。

「私は左將軍疾風、魔王殿、今は弱小国ですが頑張っていきましょ

う」

い、犬？黒装束に忍者刀見るからに忍者ルック…犬？が將軍…忍者で？

「ああ、まだ魔界に慣れていないが何とかやっていこう…光一でいいよ」

璃恩がオレの肩から疾風の頭に乗って犬っころと言いながら耳をつまむ。

もう一つの人影が立ち上がる。ピンク色の長い髪をなびかせ、とがった耳が目につく

うつむき顔を真っ赤にさせてやっとしゃべり始めた。

「リンス…右將軍で…ダークエルフ……よ、よろしく」

言い切るなり即座に椅子に座る。とても恥ずかしかったのか耳まで真っ赤にしている。

まゝオレはそこそこゲームとかやっているがダークエルフといえは残忍かつ冷酷で

雑魚なのに意外と強いことが多いキャラだが、キャラちがうだろ。

「こちらからもよろしく」

「うん上出来、リンスがはじめて会う人のここまでしゃべるとは、少し驚き。

さて自己紹介はこれくらいにして、本題これからのことを話しましょう」

ジンジャーがグダグダと今の状況やら隣の国がどうとやらあまり関係のなさそうな

話が二時間弱。

軽くカッとして所で、やっとまとまったらしい。

「じゃあ疾風が魔界ニンジン収穫調査」
疾風が軽く頷く。

「次、リンスは壊れた壁の修理」
「わかった…」

「マールは城内警護」
「了解でも滅多お客来ないからな」

「で、私は隣国調査」

話し合いが終わったらしい。話の内容は右から左でさっぱりわからなかった。

疾風とリンスの二人と挨拶ができただけでいいだろう。

「あの〜結局オレはなにをすればいいんだ？」
「う〜んそうね…」

ジンジャーの右頬がニヤリとつりあがる。
これは意地悪をする顔だ。短い付き合いでも分る邪悪な顔だ。

「便所掃除でもしてもらおうかしら では決定、文句批判等、一切受け付けません」

ジンジャーがおーほほほと笑っていやがる。
一応オレ魔王じゃなかったんですか？

「この悪魔めっ」
「あら、お褒めに与り光栄デス、まおうさま」
魔界に来て初めての仕事が便所掃除……

俺は、ホントに魔王さま？ 「第2話」(後書き)

はい

読んでいただきありがとうございます、阿山利泰です。

これからも精進していきます〜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6136b/>

あなたは、強い魔王さま？

2010年10月10日14時16分発行